HAND TO HAND
手　で　繋　が　る　家

アン・サリヴァン（1866年4月14日 - 1936年10月20日）

マサチューセッツ州に生まれる。３歳のときに目の病に冒され視力を失いかけるが、その後治療によって回復する。当時としては珍しく学校に通い、大学を主席で卒業後、友人の紹介でヘレン・ケラーの家庭教師として雇われることになる。自身が盲目であった経験から、ヘレンに対して厳しく教育を続け、当時としては珍しく優秀な女子大学に入学させることができ現在でも語り継がれる物語となっている。
1936年、ニューヨークでその70年の生涯を終えた。
視力を失ったヘレンにとって、世界を“みえる”ようにしてくれた彼女はまさに、ヒーローだったのではないだろうか。

ヘレンの教育を終えたアンは視覚しょうがい者の教育環境を多くの人に知ってもらう為に日本にやってくることになる。

▼視覚しょうがい者に対し、行政の取り組みがなされている

▼近隣に点字などを扱う公共施設を設けている

▼近隣に教育機関があり情報発信の拠点となる場所

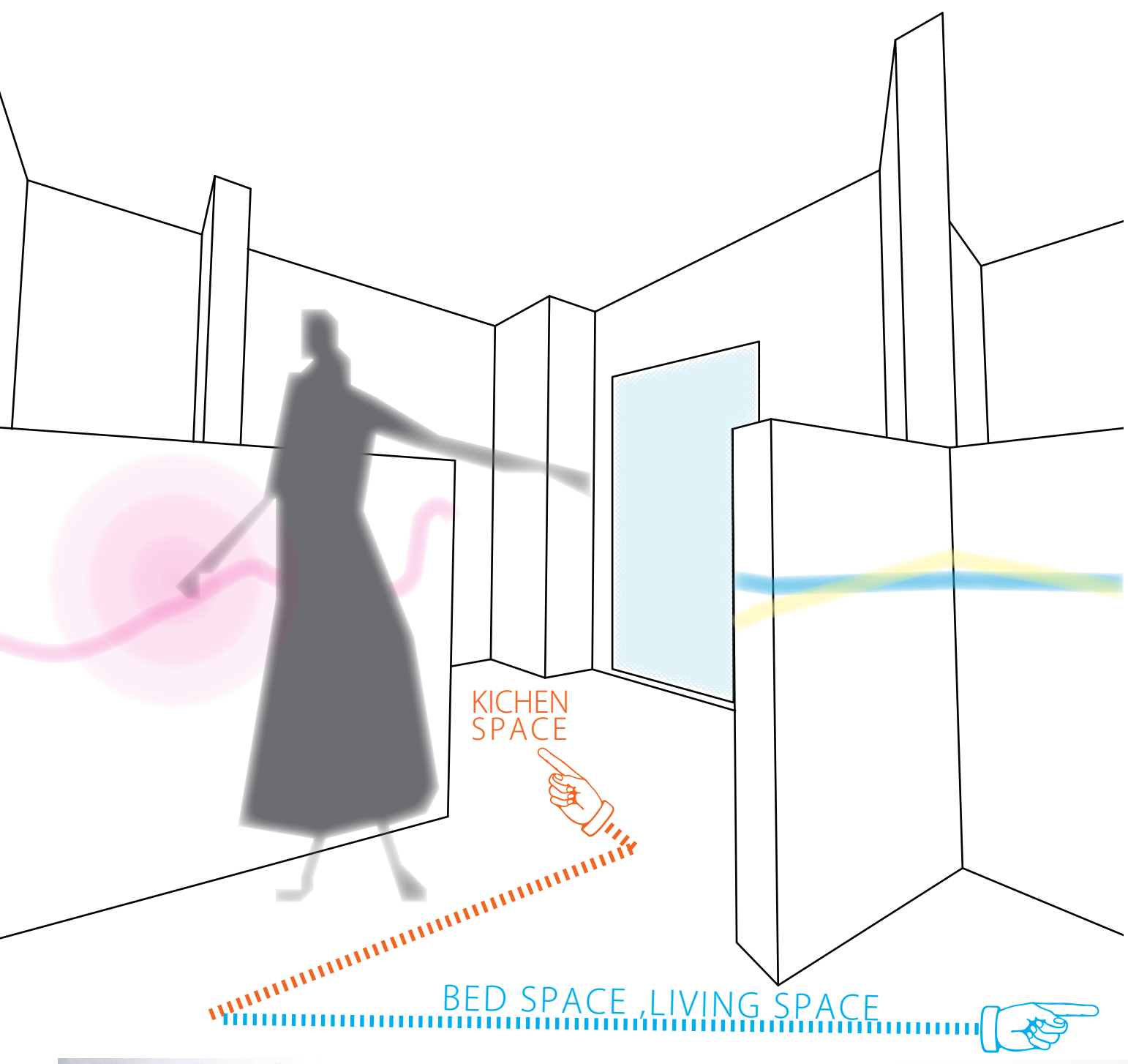
３点を考慮し、居住地域を考え始めた。交通インフラにも恵まれ点字図書館などが多くあり様々な大学が集中している西早稲田から高田馬場を居住地として考え始める。外国人留学生も多いため、情報を集めやすい環境でもある、と日本語がまだままならない彼女は考えた。

BEFORE (1TH FLOOR)

▼建築データ
西早稲田駅から徒歩３分
完成年月 2002年９月（築９年）
間取り / 総面積　1LDK　51.12 ㎡
階　　４階 / 5階建の地下１階
周辺施設　一般総合病院 / 点字図書館
　　幼稚園 / 小中学校 / 大学
季節ごとにお祭りが開催される地域

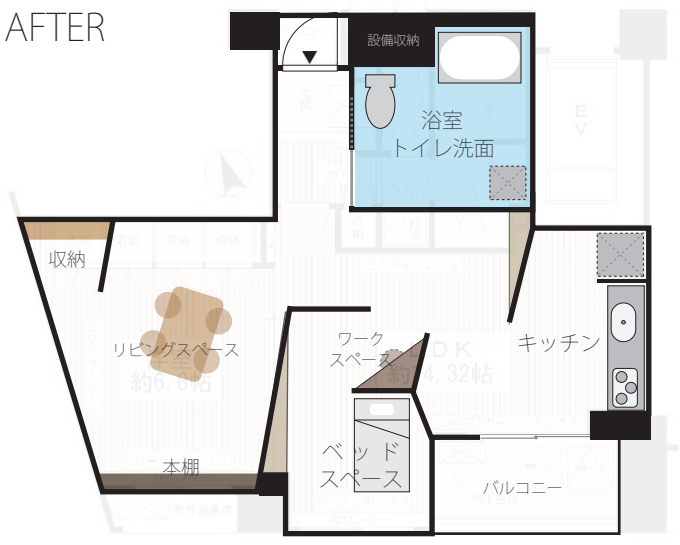
窓がなく暗い地下階の住宅は、非常に暗いため一般的には人気がないとされるが、アンは視覚の治療をしたため、日の光が苦手であった。そのため光が差し込みにくい地下一階を選ぶ。周辺敷地は緑も多くあり、拠点となる西早稲田駅からすぐの敷地である。新宿区であるにもかかわらず、周辺には戸山公園の緑が多く存在し、季節ごとに様々なイベントが催される。情報の発信源として、様々なコミュニティとの関係を結ぶことができる可能性を見出し、最適な場所と判断した。

RENOVATION PLAN

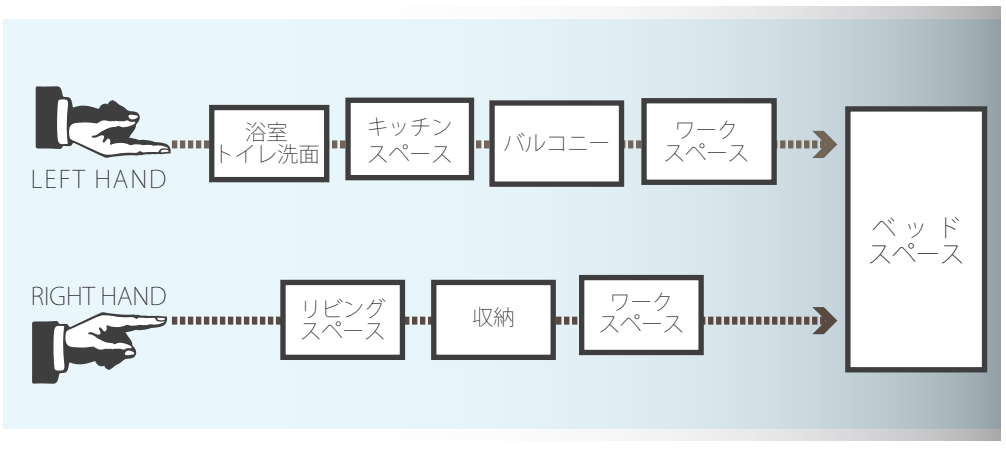


玄関からリビングスペースを望む

AFTER



アンは、視力がなくても部屋を渡り歩くための指標として「壁」を使うことができないかと考えた。
壁を伝って歩くことで導線をつなぎ、視覚しょうがい者を家に招いた際もわかりやすく案内できることができる。
人との関わりをつなげて行く中で、「手で触ってわかる」という一つの基は誰にとっても同様である。奥に行けば行くほどプライベートスペースとなる。



玄関から入り、ひだり手を壁にあて進むとトイレ/キッチンスペースの順に進むことができ、右手をつくとリビングに行くことができる。全体の部屋は一室空間となっており、どこに居ても室内の音を感じることができる。最奥にベッドスペースが設けることで、パブリックとプライベートの空間を曖昧に分化する。